

ジャイナ教聖典における uvahi

唐 井 隆 徳

1. はじめに

初期仏典における難解な用語を研究する際、古層のジャイナ教聖典を用いることは極めて有効であり、両教の資料を比較した研究成果も数多く報告されている。しかし、本稿で扱うアルダ・マーガディー語 uvahi, uvāhi, uvadhi, uvādhi などは、パーリ語 upadhi, upādhi などと意味的に関連していることは明らかであるにも関わらず、詳細な比較研究がそれ程なされていないことから、研究の余地が残っているテーマと言えよう。

初期仏典における upadhi¹⁾は研究者によって種々に訳されている²⁾ため、何を表す用語なのか明確ではない。そこで、筆者は以前に初期仏典における用例を調査し、upadhi が upa-√dhā (近くに置く) から派生した語であることから「所有物」と「所有」に訳し分ける必要性を指摘した³⁾。しかし、その訳し分けは困難であり、どちらか判別できない場合も多い⁴⁾。そこで、upadhi を解明する一助となることを期待し、本稿ではジャイナ教聖典の中でも古層と言われる⁵⁾ Āy I, Sū I, Utt, Das, Isi を中心に uvahi の用例を眺め、その用法を明らかにすると共に、そこから推測できる uvahi の位置づけを考察する。さらに、初期仏典における upadhi の用法と比較し、その共通性と特殊性とを指摘したい。

1) upadhi に関する先行研究として、Bhattacharya [1968]、宮本 [1975] などが挙げられる。

2) upadhi の諸訳については、服部 [2011: pp. 377-386] を参照。

3) upadhi の訳し分けについては、拙稿 (唐井 [2015]) を参照。

4) CPD s. v. upadhi.

5) Schubring [1935: pp. 57-58] を参照。

2. uvahi について

ジャイナ教聖典に見られる uvahi は、辞書⁶⁾によると衣や装飾や家などの世俗的な所有物を表す語であり、初期仏典に見られるような所有や所有欲を意味する用例は記載されていない⁷⁾。また、uvahi に言及する *Thāṇaṅga* 3. 1⁸⁾, *Viyāhapaṇṇatti* 18. 7⁹⁾ によると、uvahi は業 (kammovahī)、肉体 (sarīrovahī)、単なる身のまわりの用具 (bāhirabhaṇḍamattovahī) という三種の所有物に分類されている¹⁰⁾。三種類のうち、業が所有物であるという見方は一般的ではないかもしれないが、業を靈魂に付着する物質と見做すジャイナ教の教義を考えれば自ずと受け入れられるだろう。一方、ジャイナ教中期の綱要書であり、空衣派・白衣派の両派から権威書と見做されるウマースヴァーティの *Tattvārthādhigamasūtra* には、外面的な所有物と内面的な所有物 (bāhya-abhyantaropadhyoh) とあり、内面的な所有物とは肉体 (śarīra) や汚れ (kaṣāya) に関するものと説かれる¹¹⁾が、ウマースヴァーティはこれ以上詳述しない¹²⁾。以上のことから、ジャイナ教聖典における uvahi は、業や煩惱などを所有物と見做した内面的なもの、身のまわりにある様々なものを所有物と見做した外面的なもの、以上二つに分類して考察していくことが適当であり、これ以降、それぞれを内面的な所有物、外面的な所有物と称し、古層のジャイナ教聖典における uvahi の用例を挙げていきたい。

6) AMgD s. v. uvahi.

7) AMgD によると、uvahi には世俗的な所有物以外に「欺瞞」という意味が与えられている。初期仏典における upadhi の中で「欺瞞」を表す用例は見受けられない。古層のジャイナ教聖典においてもそれ程見られないが、Utt 34. 25 (p. 243) には leśyā 説の灰色 (kāu) を説明する際に「欺瞞」を意味する uvahi が用いられている。

8) Muni Nathmal (ed.), *Aṅga Suttāṇi I*, Ladnun, 1974, p. 549.

9) Muni Nathmal (ed.), *Aṅga Suttāṇi II*, Ladnun, 1974, p. 773.

10) uvahi と同様に pariggaha もこれら三つに分類される。アバヤデーヴァの註釈によると、pariggaha は我がものとする (mamatva) や所有物への執着によって引き起こされたものであるという点で uvahi とは異なる。Ohira [1994: pp. 155-156] を参照。

11) 金倉 [1944: p. 195] を参照。

12) Schubring [1935: pp. 196-197] を参照。

2.1. 内面的な所有物としての uvahi

まず、内面的なものに関して、古層のジャイナ教聖典には業を表していると思われる uvahi のみが確認できた。以下に挙げる用例は、マハーヴィーラが出家し苦行者として生活する様子を描いた Āy I の第九章における韻文資料である。

Āy I. 9. 1. 14–15 (p. 41. 7–10)

‘adu thāvarā ya tasattāe tasa-jīvā ya thāvarattāe,
adu savva-joṇiyā sattā, kammuṇā kappiyā puḍho bālā’. (14)

時に、動かない〔生物〕たちは動く性質のものに、動く生物たちは動かない性質のものに〔再生する。〕

また、一切の生まれの衆生たちは、愚かにも業によって各自〔それに〕応じたもの〔となる。〕

bhagavaṃ ca evaṃ annesī: ‘sovahie hu luppāi bāle’;
kammaṃ ca savvaso naccā taṃ paḍiyāikkhe pāvagaṃ bhagavaṃ. (15)

そして、世尊はこのように知った。「実に、〔業という〕所有物 (uvahi) を伴う愚か者は害される」

そして、業をあまねく知って、世尊はその悪しきことを避けるだろう。

ここでの uvahi は文脈上、業を意味している¹³⁾と考えるのが妥当ではないだろうか。ジャイナ教における業とは行為の結果、靈魂に付着する物質を指し、uvahi が業を意味する場合、靈魂を主体として「近くに置くもの」という視点から、uvahi は業のあり方を表現した用語であると言えるだろう。

一方、Āy I には uvahi だけではなく uvāhi の用例も散見される。uvāhi は upa-ā-√dhā から派生していると思われるが、upa-√dhā と基本的な意味にそれ程大きな違いがあるわけではない。また、以下に挙げる用例の Jaina-Āgama-Series 版によれば、Schubring 校訂本に uvāhī とある箇所を uvadhī とし、さらに

13) この用例における uvahi に対する訳として、Jacobi [1884: p. 81] “the conditions (of existence)”, Schubring [1926: p. 117] “allem was er hat” がある。

uvahī, uvādhī, uvāhī と種々の異読を挙げており¹⁴⁾、uvahi, uvāhi の区別が明瞭ではない。そこで、本稿では差し当たり uvāhi も「所有物」と訳す。

Āy I. 3. 4 (p. 17. 7-14)

je koha-damṣī se māṇa-damṣī, je māṇa-damṣī se māya-damṣī, … lobha-d. … pejja-d. … dosa-d. … moha-d. … gabbha-d. … jamma-d. … māra-d. … naraya-d. … tiriya-d. … dukkha-damṣī. se mehāvī abhinivvattejjā koḥaṃ ca māṇaṃ ca māyaṃ ca lobhaṃ ca pejjaṃ ca dosaṃ ca mohaṃ ca gabbhaṃ ca jammaṃ ca māraṃ ca narayaṃ ca tiriyaṃ ca dukkhaṃ ca. eyaṃ pāsagassa dāṃsaṇaṃ uvaraya-satthassa paliyanta-karassa,¹⁵⁾ āyāṇaṃ nisiddhā sagaḍa-bbhi. kim atthi uvāhī pāsagassa? na vijjai, n’ atthi – tti bemi.

怒りを見る者は慢心を見る。慢心を見る者は偽りを見る。…貪りを見る。…愛しさを見る。…嫌悪を見る。…迷いを見る。…母胎を見る。…生まれを見る。…死を見る。…地獄を見る。…畜生を見る。…苦を見る。その聡明な者は怒り、慢心、偽り、貪り、愛しさ、嫌悪、迷い、母胎、生まれ、死、地獄、畜生、苦を滅するべきである。武器をおろし、終わらせ、〔正しく〕見る者にはこの観察がある。〔彼は、業の〕取り込みを阻み、自ら作った〔業を〕壊す。〔正しく〕見る者にとって、どうして〔業という〕所有物 (uvāhi) があるだろうか。〔それは〕存在せず、ないと私は言った。

前半部分はジャイナ教の縁起説とも呼べる箇所¹⁶⁾であるが、使われている用語から判断すれば輪廻を示唆している。次に目を向けるべき箇所は下線部である。ここでは、殺生することなく正しく見る者 (pāsaga) には前半部分の観察があると説かれている。武器を表す sattha は Āy I の第一章 *Sattha-parinnā* (武

14) Āy(J) I. 3. 4 (p. 38).

15) pāsagassa dāṃsaṇaṃ uvaraya-satthassa paliyanta-karassa の箇所は既出のため、テキストでは省略されているが、ここでは便宜上復元しておく。また、Schubring 校訂本では dāṃsaṇaṃ の後にカンマが付されているが、Āy(J) I. 3. 4 (p. 38) では paliyanta-karassa の後にカンマが付される。本稿では uvaraya-satthassa paliyanta-karassa が pāsaga を形容するものと考えているため、カンマの位置は後者の読みに従う。

16) 中村 [1991: pp. 232-240] を参照。

器の放棄)¹⁷⁾において、kammāsamārambha (業を企てること)、anne v’ aṇega-rūve pāṇe vihiṃsai (他の多種多様な生き物たちを害する) と並記して用いられ、明らかに殺生の意味で用いられていることから、ここでも同様に理解した。下線部以降にはその殺生を放棄した者に関して、āyāṇaṃ¹⁸⁾ nisiddhā sagaḍa-bbhi (〔彼は、業の〕取り込みを阻み、自ら作った〔業を〕壊す) という業滅を想起させる部分も見られる。その後、kim atthi uvāhi¹⁹⁾ pāsagassa? (〔正しく〕見る者にとって、どうして〔業という〕所有物があるだろうか) というフレーズがあり、この uvāhi は業に関連していると考えられよう。また、このフレーズは別の箇所²⁰⁾にも見られる。さらに kammuṇā uvāhī jayai²¹⁾ (業によって所有物が生じる) という用例も見られ、uvāhi という用語が uvahi と同様、業のあり方を表現している可能性がある²²⁾。

2.2. 外面的な所有物としての uvahi

次に、身のまわりのものを所有物と見做す外面的な uvahi の用例を概観する。以下に挙げる用例は、五大誓戒の無所有に言及する箇所である。

Das 6. 20-22 (p. 36. 3-8)

jaṃ pi vatthaṃ va pāyaṃ vā kambalaṃ pāyapuñchaṇaṃ

taṃ pi saṃjama-lajjaṭṭhā dhārenti parihaṇanti ya. (20)

〔出家者たちは〕衣や鉢や布や払子をも、
自制と羞恥を目的として、着衣し、運ぶ。

na so pariggaho vutto nāyaputteṇa tāiṇā

"mucchā pariggaho vutto" ii vuttaṃ mahesiṇā. (21)

それは、模範となるナーヤプッタによって所有と言われない。

17) Āy I. 1 (pp. 1-6).

18) āyāṇa が業の取り込みを表していることについては、榎本 [1979: pp. 30-31] を参照。

19) この用例における uvāhi に対する訳として、Jacobi [1884: p. 35] “any worldly weakness”、Schubring [1926: p. 85] “Voraussetzung [für die Neuverkörperung]” がある。

20) Āy I. 4. 4 (p. 20).

21) Āy I. 3. 1 (p. 14).

22) PSM s. v. uvāhi.

「〔対象に対して〕夢中になることが所有と言われる」と、偉大な聖仙によって言われた。

savvatthuvahiṇā buddhā saṃrakkhaṇa-pariggahe
avi appaṇo vi dehammi nāyaranti mamāiyaṃ. (22)

あらゆる場合に、覚った者たちは所有物 (uvahi) によって、〔自らを〕守るための取得物に対しても、
自らの肉体に対しても我がものとししない。

ここでは、実際に物を所有しているかどうかということではなく、物に対して執着してはいけないということに力点が置かれている²³⁾。uvahi に目を向けると、取得物や肉体に執着するための手段である身のまわりのものとして扱われていることが窺えよう。

Das 10. 16 (p. 72. 1-2)

uvahimmi amucchie agiddhe annāya-uñchaṃ pula-nippulāe
kaya-vikkaya-sannihio virae savva-saṅgāvagae ya je sa bhikkhū.

所有物 (uvahi) に対して夢中にならず、貪らず、〔他人が〕無意識に残したものを〔集め、〕枯れた穀粒や粃殻のないものを有し、
売買と貯蓄を止め、一切のとらわれを離れた者、彼〔こそ〕比丘である。

ここでも、uvahi は出家者の所有物を指しており²⁴⁾、執着の対象として扱われているが、比丘はそれを離れている。次に、Utt の用例を見ていく。以下に挙げる用例は、ある王子が両親に出家を懇願したところ、初めは受諾されなかったが、最終的に出家の許しを得た時の場面である。

Utt 19. 84 (p. 151. 4-5)

migacāriyaṃ carissāmi evaṃ puttā jahā suhaṃ

23) 宇野 [2013] は、ウマースヴァーティも *Tattvārthādhigamasūtra* において Das 6. 21に見られる「所有」と同じ定義を提示していることから、空白両派ともに心理的側面の強調によって資具の所持を「所有」の例外として認める傾向があったことは間違いないと指摘する。

24) Das 12. 5 (p. 78) に見られる appovahī (所有物が少ないこと) は、聖仙たちの生活の実践として扱われており、この uvahi も同じ用法である。

ammāpīṭhi ’ṇunnāo jahāi uvahiṃ tahā.

「私は獣のように遊行するだろう」「子よ、〔あなたが〕 良いように〔なしなさい〕」

〔彼は〕 母と父によって許され、そのように所有物 (uvahi) を捨てた。

ここでは、uvahi が在家者の所有物として用いられている。また、Utt 12. 4 (p. 109) には、賤民の生まれである比丘が貧しい身なりで (pantovahiuvagaraṇa) 近づいてくるのを、聖者でない者たちが嘲笑したという記述があり、その場合の uvahi は衣など身に纏っているものを表している²⁵⁾ と言えよう。加えて、Utt には āhāraṃ uvahiṃ dehaṃ²⁶⁾ (食べ物、所有物、肉体)、āhārovahisejjā²⁷⁾ (食べ物や所有物や寝床) という用例も見られ、語の並びを見れば uvahi が衣類を示唆していると考えるのが妥当かもしれないが、身のまわりにある様々なものを表現しているということは看取できよう。Isi においても、piṇḍaṃ sejjāṃ uvahiṃ²⁸⁾ (托鉢食、寝床、所有物) などがあり、Utt に見られる用例とそれ程変わらない。

2.3. ジャイナ教聖典における uvahi の位置づけ

以上、内面的な所有物と外面的な所有物とに分類して uvahi を考察した。ここではそれらをふまえながら、ジャイナ教聖典において uvahi がどのような役割を担っていたかについて私見を述べたい。

まず、内面的な所有物として業のあり方を表していると考えられる uvahi, uvāhi について言及した。先述したように、ジャイナ教の教義では行為の結果、靈魂に業が漏入して (āsava) 付着する。それによって靈魂の本性が覆われ、束縛 (bandha) が生じる。業を滅するためには新たに漏入するのを防ぎ (saṃvara)、付着した業を苦行によって滅さ (nijjarā) なければならない²⁹⁾。

25) Jacobi [1895: p. 51] を参照。

26) Utt 24. 15 (p. 180).

27) Utt 24. 11 (p. 179).

28) Isi 35 (p. 539). Isi 25 (p. 528) を参照。

しかし、このようなジャイナ教の術語は、古層の段階では教義として定着していない³⁰⁾と指摘されており³¹⁾、既に業を表す *uvahi*, *uvāhi* の用例を概観したように、術語が定着する以前の業のあり方を表す萌芽的な用例は古層のジャイナ教聖典に散在すると考えられる。そこで、業のあり方を表す用語を見ていくと、*āsava* (漏入) は、輪廻の原因が体に漏れ入るということを表しており、ある段階でそれが業の漏入に固定されていく傾向があること、また、霊魂から見ると漏入は *āyāṇa*, *ādāṇa* (取り込み) と表されることは既に論証されている³²⁾。次に、業が付着することを表す用語として、*bandha*³³⁾ (束縛)、*raya*³⁴⁾ (塵)、*mala*³⁵⁾ (垢)、*raya-mala*³⁶⁾ (塵垢)、*leva*³⁷⁾ (漆喰)、*salla*³⁸⁾ (矢)、*saṃga*³⁹⁾ (とらわれ) などがあり、いずれも霊魂と業の関係を表す用語として相応しいと言えよう。ここで指摘しておかなければならないことは、従来それ程取り扱われることのなかった *uvahi* という用語も、業のあり方を表す多様な用語の一つであった可能性があるということである。先述したように、*Ṭhāṇaṃga* や *Viyāhapaṇṇatti* が明確に *uvahi* を業と見做していることから、その可能性を

29) 長崎 [1979: pp. 501-502] を参照。

30) *Āy* I. 8. 8. 10 (p. 39) における *āsava* は外面的な危難を表しており、業の漏入ではない。
Schumithausen [1992: pp. 117-129] を参照。

31) Dixit [1973: pp. 26-27] [1978: p. 9, 20] は、*āsava*, *saṃvara*, *nijjarā* というジャイナ教の用語は後の体系であると指摘し、*Āy* I, *Sū* I の段階では、どのように業が漏入するのか、どのように業が付着するのか、どのように業が離れるのかについては説かれていないと主張する。

32) 榎本 [1979] を参照。

33) Das 4ではジャイナ教の解脱道が簡易に説かれ、Das 4. 1-9 (pp. 14-15) には、*bandhāi pāvayaṃ kammaṃ* (悪業を結ぶ) という句がある。また、Das 4. 15-16 (p. 16) には、*puṇṇa* (福)、*pāva* (悪)、*bandha* (束縛)、*mokkha* (解脱) が並記される。さらに、*bandha* だけでなく Das 4. 21 (p. 16) には、業塵 (*kamma-raya*) を振り払うという内容も説かれている。

34) Shah [1977]、煎本 [1986] を参照。

35) Das 8. 62 (p. 55)。

36) Das 9. 3. 15 (p. 65), *Isi* 23 (p. 523)。

37) 谷川 [1981] を参照。

38) 煎本 [1987] を参照。煎本は *Isi* 17における *salla* が業と関わっていることを指摘している。また、*Sū* I. 8. 10 (p. 41) には *paṇolla pāvayaṃ kammaṃ sallaṃ kantai antaso* (悪しき業を除き、ついに矢を抜き取る) とあり、ここでの *salla* も業が体内に侵入し付着する様子を表していると言えよう。

39) *Utt* 3. 6 (p. 80) には *kamma-saṃga* という複合語がある。

排斥することはできない。勿論、古層のジャイナ教聖典において、業のあり方を表す他の語と比較すれば、内面的な所有物としての uvahi の用例は僅かである。uvahi に限ってみれば、先述した用例だけしか確認できなかった。しかし、その用例の少なさこそが、ジャイナ教の教義が体系化されていく過程で、uvahi が業のあり方を表す用語として定着しなかったということを示唆しているのではないだろうか。一方、管見によれば、古層のジャイナ教聖典における uvahi の用例の多くが外面的な所有物を表している。そして、以上のことは uvahi の語の成り立ちに理由があると推測できる。uvahi は「近くに置く」という動詞から派生しており、uvahi が業を指す場合、靈魂に付着した業のことを「近くに置いたもの」と称したことになる。しかし、束縛 (bandha) や塵 (raya) など、業のあり方を表す他の用語は、靈魂と業が強固に接触している様子を表現しているとも考えられよう。Sū I. 2. 2. 27の用例では、uvahi が「振り払う」対象として扱われており、業のあり方を表現している可能性がある⁴⁰⁾。

40) Sū I. 2. 2. 27 (p. 15. 15-16)

mā peha purā paṇāmae abhikaṃkhe uvahiṃ dhuṇittae

je¹⁾ dūmaṇa tehi no nayā te jāṇanti samāhim āhiyaṃ.

以前に〔存在し、人を〕屈服させる諸々の〔欲望の対象〕を見てはならない。〔業という〕所有物 (uvahi) を振り払おうと欲しなさい。

悪しき意の者たちによって屈服しない者たちは、精神統一が説かれたのを知る。

1) Vaidya 校訂本には ja とあるが、Bollée [1988: p. 10] に倣う。

この用例における uvahi に対する訳として、Jacobi [1895: p. 256] “delusion”、Schubring [1926: p. 134] “Voraussetzung [für ein neues Dasein]”、榎本 [1986: p. 37] 「(業や煩惱などの) 附属物」、Bollée [1988: p. 67] “äussere Daseinsgrundlagen” があり、訳に統一がなく uvahi という用語の難解さが窺える。また、PSM によると Sū I. 2 では karma を表すとあり、本稿ではこの理解に倣った。その理由として、ここでは振り払う対象として uvahi が説かれている点に着目した。ジャイナ教聖典において「振り払う (√dhū)」という表現は業や煩惱に対して用いられ、特に業に関する用法が多く、重要であると従来指摘されている (榎本 [1987] [2001]、阿部 [2001: pp. 92-93, 277-288]、山崎 [2001] を参照)。また、上記の用例と同じ章には「振り払う」という表現を比喩的に用いながら業滅を表現する用例も見られるので以下に示す。

Sū I. 2. 1. 15 (p. 12. 15-16)

saunī jaha paṃsugunḍiyā vihuṇiya dhaṃsayaī siyaṃ rayam

evaṃ daviovaḥaṇavaṃ kammaṃ khavai tavassi māhaṇe.

塵に覆われた鳥が付着した塵を振り払って散らすように、

しかし、「振り払う」の目的語として多いのは塵 (raya) に関する用例であり⁴¹⁾、初期仏典においても「塵を振り払う」という用例⁴²⁾が見られることから、「振り払う」の目的語としては uvahi よりも塵が適していると言えよう。また、視点を「業が体に漏れ入る」ということに移しても、漏入 (āsava) や取り込み (āyāṇa, ādāṇa) という用語は、「近くに置く」という uvahi と比べて、単語自身がより明瞭に業が体に流れ込んでくる様子を表現していると言える。一方、業の用法とは対照的に、主体の身のまわりにある様々な所有物は「近くに置く」という表現に即しているとも考えられよう。このように、語の成り立ちこそが、業のあり方を表す用語として uvahi が定着せず、身のまわりのものを表す外面的な uvahi の用例が多い要因となり得るのではないだろうか。

また、古層以外のジャイナ教聖典に目を向けると、*Viyāhapaṇṇatti* 25. 7⁴³⁾、*Uvavāiya* 30⁴⁴⁾ には、六種類の内的苦行に関して説かれている。そのうち放捨 (viosagga) の項目では、実体があるものに関する放捨 (davva-viosagga) と実体がないもの (状態) に関する放捨 (bhāva-viosagga) とに分類されている⁴⁵⁾。そのうち、前者には肉体 (sarīra)、集団 (gaṇa)、食べ物や飲み物 (bhattapāṇa) と共に uvahi が、後者には汚れ (kasāya)、輪廻 (saṃsāra) と共に業 (kamma) が配置されていることを考慮に入れても、uvahi は外面的な所有物を意味しており、業は uvahi の範疇にないということが看取される。このように、外面的

このように、自制し修行し、苦行者である真のバラモンは業を破壊する。

但し、振り払う対象となるものは業だけではないため、他の可能性も考慮する必要はある。したがって、ここでは uvahi が業を表す可能性があるということを指摘したに過ぎない。

41) jayā dhuṇai kamma-rayam (Das 4. 21 (p. 16)), vihuṇāhi rayam pure kaḍam (Utt 10. 3 (p. 102)), atṭhaviha-kamma-raya-malam vidhuṇita (Isi 23 (p. 523)) などの用例では「塵を振り払う」ということが業と関連して説かれていると言えよう。

42) SN 9. 1 (Vol. I, p. 197), Ud 3. 1 (p. 21).

43) Muni Nathmal (ed.), *Aṅga Suttāṇi II*, Ladnun, 1974, pp. 971-975.

44) E. Leumann (ed.), *Das Aupapātika Sūtra: erstes Upāṅga der Jaina: Einleitung, Text und Glossar* (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, VIII-2), Leipzig, 1883, pp. 40-44.

45) 内的苦行と外的苦行に関しては、古層のジャイナ教聖典である Utt 30 (pp. 212-215) に既に見られ、内定苦行の放捨の項目は肉体を捨てること (kāyassa viussagga) と説明されている。但し、Alsdorf [1966: pp. 57-62] は韻律という観点から、Utt 30には二次的に増補した部分が見られることを指摘している。

な所有物を意味する uvahi の用法が一般的になっていくのではないだろうか。

3. 初期仏典における用例

既に、ジャイナ教聖典における uvahi の用法を考察した。古層のジャイナ教聖典と初期仏典との間に多くの平行句や用語の共通性があることを考慮に入れば、初期仏典中に uvahi に類似する用法があることも予想される。まず、外面的な所有物に関する用例を挙げる。

SN 1. 2. 2 (Vol. I, p. 6. 9-13)

nandati puttehi puttimā gomiko gohi tath-eva nandati

upadhīhi narassa nandanā na hi so nandati yo nirūpadhīti

子どもを持つ者は子どもたちによって喜ぶ。同様に牛飼いは牛たちによって喜ぶ。

諸々の所有物 (upadhi) によって人には喜びがある。実に所有物を離れた者は喜ばない。

socati puttehi puttimā gomiko gohi tath-eva socati

upadhīhi narassa socanā na hi socati yo nirupadhīti.

子どもを持つ者は子どもたちによって憂える。同様に牛飼いは牛たちによって憂える。

諸々の所有物によって人には憂いがある。実に所有物を離れた者は憂えない。

ここでの upadhi⁴⁶⁾ は、身のまわりにある世俗的な所有物を表している⁴⁷⁾ と言えよう。一方、内面的な所有物に関して、それを明確に表す用例は見受けられ

46) SN-a 1. 2. 2 (Vol. I, pp. 31-32) によると、upadhi には kāmā-upadhi, khandha-upadhi, kilesa-upadhi, abhisāṅkhāra-upadhi の四種類があることと、この用例における upadhi が kāmā-upadhi に相当するということが説明されている。

47) Jā 538 (Vol. VI, p. 22) における upādhiratha や Jā 544 (Vol. VI, p. 252) における upādhiya は車 (ratha) と関連しており、前者の upādhi は註釈によると、黄金の履き物 (suvanṇa-pādukā) を表し、後者の upādhiya は車の一部分であることが看取される。このように、用例数は少ないが upādhi という語も外面的な所有物を表していると考えられ、ジャイナ教聖典における uvahi と関連していると言えよう。

ない。しかし、初期仏典には「所有」を意味する *upadhi* の用例がある⁴⁸⁾。

Ud 3. 10⁴⁹⁾ (VRI, p. 106. 3-5)

“*upadhiñ hi paṭicca dukkham idaṃ sambhoti,
sabbupādānakkhayā natthi dukkhassa sambhavo.*

所有 (*upadhi*) によってこの苦が生じる。

一切の執着の滅尽により、苦の生起はない。

lokam imaṃ passa; puthū avijjāya paretā bhūtā bhūtaratā aparimuttā;

この世間の人を見なさい。無明に敗れた凡夫である諸々の存在は〔その〕
存在を楽しみ、解脱しない。

ye hi keci bhavā sabbadhi sabbatthatāya

sabbe te bhavā aniccā dukkhā vipariṇāmadhammā”

なぜなら、いかなる生存もあらゆる所に、全体に存在し、

それら一切の生存は無常であり、苦であり、変化する性質であるからである。

ここでは、*upadhi* と執着 (*upādāna*) が同義であることが看取され、この *upadhi* を所有物と訳すことはできない。以上の引用文を要約すれば、「所有しようとすることによって苦しみが生じる。なぜなら、対象である生存は無常であり変化していくからである」と理解できよう。また、同様の句として、*socanti janā mamāyite, na hi santi niccā pariggahā*⁵⁰⁾ (人々は我がものとするために

48) 拙稿 (唐井 [2015: pp. 4-5]) を参照。

49) PTS 版に見られる該当箇所は混乱も多く見られ意味を把握しづらい。また、平行句を参考にしても訂正すべきと思われるので VRI 版に従った。尚、VRI 版では該当箇所が散文として扱われているが、以下に示す平行句との比較によりこのように引用した。

Uv 32. 37-38

*pratītya duḥkham upadhiṃ bhavaty upadhisambhavam
kṣayāt sarvopadhīnāṃ tu nāsti duḥkhasya sambhavaḥ. (37)*

所有によって苦がある。〔それは〕所有から生じたものである。

一方、一切の所有の滅尽により、苦の生起はない。

*anityā hi bhavāḥ sarve duḥkhā vipariṇāmināḥ
paśyataḥ prajñayā sarve kṣīyante nābhinanditāḥ. (38)*

なぜなら、一切の生存は無常であり、苦であり、変化する性質であるからである。

知恵によって見ている者にとって、一切〔の生存〕は滅尽し、歓喜されない。

憂える。なぜなら諸々の取得物は常住でないからである）という用例もあり、*upadhi* を所有と訳すことで、後半の生存が無常であるという理由句が意味をなすと言えるだろう。

以上、ジャイナ教聖典に引き続き、初期仏典における *upadhi* に関しても、限られた用例ではあるが確認した。ここで両教の用法に関して纏めておきたい。まず、外面的な所有物の用例は両教に共通する用法⁵¹⁾ と言えよう。一方、内面的な用法にそれぞれの特殊性が垣間見える。ジャイナ教は業をも所有物と見做し *uvahi* を用いるが、仏教は所有物ではなく、「所有する」という作用に着目し、所有欲という意味で *upadhi* を用いている。仏教と同様、ジャイナ教でも無所有を主張するため、所有欲を否定する文脈は確認される⁵²⁾ が、*uvahi* がその役割を果たすことはないだろう。

4. おわりに

本稿では、ジャイナ教聖典における *uvahi* を内面的な所有物と外面的な所有物とに分類し、その用法を確認した。さらに、補遺的ではあるが初期仏典における *upadhi* の用例も扱った。

古層のジャイナ教聖典には、*uvahi* が業のあり方を表していると考えられる

50) Sn 805. Sū I. 2. 2. 9 (p. 14) を参照。

51) *Thāṇaṃga, Vīyāhapaṇṇatti* に見られた肉体 (*sarīra*) を表す *uvahi* の用法を初期仏典に見出すことはできないが、以下に示す用例はそれに相当するものと言えよう。

It 77 (p. 69. 10-13)

kāyaṃ ca bhindantaṃ ñatvā viññāṇaṃ ca virāgaṇaṃ

upadhīsu bhayaṃ disvā jātimaraṇaṃ-ajjhagā

肉体 (*kāya*) が壊れること、識が衰えることを知って、
諸々の所有物 (*upadhi*) のうちに恐れを見て、生死を理解した。

この資料における *upadhi* は *ab* 句から考えて、肉体や識を所有物と見做している。また、この韻文資料に付随する散文資料 (It 77 (p. 69)) には *bhindantāyaṃ bhikkhave kāyo, viññāṇaṃ virāgaḍhammaṃ, sabbe upadhī aniccā dukkhā vipariṇāmadhammā* (比丘たちよ、この肉体は壊れる。識は衰える性質である。一切の所有物 (*upadhi*) は無常であり、苦であり、変化する性質である) とあり、*upadhi* が肉体や識を指していると言えるだろう。

52) 中村 [1991: pp. 220-222]、山崎 [2018: pp. 441-442, 608-610, 633-634] を参照。

用例が見られる。しかし、その類の用例はそれ程見られず、身のまわりのものを表す *uvahi* の用例が多くを占めていた。そこで、本稿では業を表す *uvahi* が定着しなかった理由として、*uvahi* という用語が *upa-√dhā*（近くに置く）の派生語であることに着目し、「近くに置く」という表現がジャイナ教の業のあり方を表す語として適さず、むしろ、身のまわりにある外面的な所有物にこそ適した表現であった可能性を指摘した。加えて、業が *uvahi* の範疇外にある資料を提示することで、外面的な所有物を表す *uvahi* の用法が一般的であることも指摘した。さらに、以上の二つの視点から初期仏典を眺め、ジャイナ教と共通する用法があることと、仏教特有の用法があることを確認した。

初期仏典における *upadhi* に関して問題となるのは縁起説における用例である。三支縁起説⁵³⁾は *upadhi* を支分とした縁起説⁵⁴⁾だが、それ以外の各支縁起説では *upadhi* を支分とすることはない。また、縁起説に限らず、*upadhi* が体系化された思想の中で用いられることは非常に少ない。そのため、なぜ *upadhi* が他の各支縁起説の支分として用いられないのか、また縁起説の成立史上、三支縁起説はどこに位置づけられるべきなのかを考察しなければならないが、これについては稿を改めたい。

【略号表】

AMgD	Muni Shri Ratnachandraji Maharaj, <i>An Illustrated Ardha-Māgadhī Dictionary</i> , 5 vols.
Āy	<i>Āyāraṃga</i> , W. Schubring (ed.), <i>Ācārāṅga-Sūtra: erster Śrutaskandha: Text, Analyse und Glossar</i> (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, XII- 4), Leipzig, 1910.
Āy(J)	<i>Āyāraṃga</i> , Muni Jambūvijaya (ed.), <i>Āyāraṅga-Suttam</i> (Jaina-Āgama-Series, No. 2 (1)).
CPD	<i>A Critical Pāli Dictionary</i> , Copenhagen, 1924 ⁻ .
Das	<i>Dasaveyāliya</i> , E. Leumann (ed.) & W. Schubring (tr.), <i>The Dasaveyāliya Sutta</i> , Ahmedabad, 1932.
Isi	<i>Isibhāsiyāṃ</i> , W. Schubring (ed.), <i>Isibhāsiyāṃ: Aussprüche der Weisen</i> (Alt- und Neu-Indische Studien, 14), Hamburg, 1969.
It	<i>Itivuttaka</i> , PTS.
Jā	<i>Jātaka</i> , PTS.
PSM	H. D. T. Sheth, <i>Pāia-sadda-mahaṇṇavo</i> .

53) SN 12. 66 (Vol. II, pp. 107-112).

54) 拙稿（唐井 [2015]）を参照。

- PTS Pali Text Society.
 SN *Samyutta-Nikāya*, PTS.
 Sn *Suttanipāta*, PTS.
 SN-a *Samyuttanikāya-Aṭṭhakathā (Sāratthappakāsinī)*, PTS.
 Sū *Sūyagaḍaṃga*, P. L. Vaidya (ed.), *Sūyagaḍaṃ: For the first time Critically Edited with the Text of Nirvyūkti, Various Readings, Notes and Appendices Part I*, Poona, 1928.
 Ud *Udāna*, PTS.
 Utt *Uttarajjhāyā*, J. Charpentier (ed.), *The Uttarādhyayanasūtra being the first Mūlasūtra of the Svetāmbara Jains* (Indian repr.), New Delhi, 1980.
 Uv *Udānavarga*, F. Bernhard (ed.), *Udānavarga*, Göttingen, 1965.
 VRI Vipassana Research Institute.

【参考文献】

Alsdorf, Ludwig

- [1966] *The Ārya Stanzas of the Uttarajjhāyā: Contributions to the Text History and Interpretation of a Canonical Jaina Text*, Wiesbaden, 1966.

Bhattacharya, Kamaleswar

- [1968] “Upadhi-, Upādi- et Upādāna- dans le Canon bouddhique pāli”, *Mélanges d'Indianisme (à la mémoire de Louis Renou)*, Paris, 1968, pp. 81–95.

Bollée, Willem B

- [1988] *Studien zum Sūyagaḍa: Textteile, Nijjuttī, Übersetzung und Anmerkungen, Teil II*, Stuttgart, 1988.

Dixit, K. K

- [1973] “Evolution of the Jaina Treatment of Ethical Problems”, *Sambodhi*, 2–1, 1973, pp. 19–38.
 [1978] *Early Jainism* (L. D. Series, 64), Ahmedabad, 1978.

Jacobi, Hermann

- [1884] *Jaina Sūtras I* (The Sacred Books of the East, XXII), Oxford, 1884.
 [1895] *Jaina Sūtras II* (The Sacred Books of the East, XLV), Oxford, 1895.

Ohira, Suzuko

- [1994] *A Study of the Bhagavatīsūtra* (Prakrit Text Series, XXVIII), Ahmedabad, 1994.

Schubring, Walther

- [1926] *Worte Mahāvīras: Kritische Übersetzungen aus Kanon der Jaina*, Göttingen, 1926.
 [1935] *Die Lehre der Jainas*, Berlin und Leipzig, 1935.

Schumithausen, Lambert

- [1992] “An Attempt to Estimate the Distance in Time between Aśoka and the Buddha in Terms of Doctrinal History”, *The Dating of the Historical Buddha Part 2*, Göttingen, 1992, pp. 110–147.

Shah, Nagin J

- [1977] “Rajas and Karman”, *Sambodhi*, 6-1, 2, 1977, pp. 57-62.

阿部慈園

- [2001] 『頭陀の研究 —パーリ仏教を中心として』 春秋社, 2001.

煎本信行

- [1986] 「初期ジャイナ教の業 —raya について—」『印度学仏教学研究』 34-2, 1986, pp. 48-51.

- [1987] 「śālya と salla について」『宗教研究』 271, 1987, pp. 166-167.

宇野智行

- [2013] 「不殺生と不注意 (pramāda)」『印度学仏教学研究』 62-1, 2013, pp. 230-236.

榎本文雄

- [1979] 「āsrava (漏) の成立について —主にジャイナ古層經典における—」『仏教史学研究』 22-1, 1979, pp. 17-42.

榎本正明

- [1986] 「Suyagaḍaṅga 第一篇第 2 章の研究」『佛教大学大学院研究紀要』 14, 1986, pp. 27-54.

- [1987] 「Jaina の tapas について」『華頂短期大学研究紀要』 32, 1987, pp. 12-30.

- [2001] 「dhuta の成立について」『佛教学浄土学研究』 永田文昌堂, 2001, pp. 51-63.

金倉圓照

- [1944] 『印度精神文化の研究 —特にヂャイナを中心として—』 培風館, 1944.

唐井隆徳

- [2015] 「三支縁起説の成立 —upadhi の用例を通して—」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』 43, 2015, pp. 1-18.

谷川泰教

- [1981] 「蓮華と水」『仏教学会報』 7, 1981, pp. 11-20.

長崎法潤

- [1979] 「ジャイナの業思想」『業思想研究』 平楽寺書店, 1979, pp. 499-533.

中村元

- [1991] 『中村元選集〔決定版〕第10巻 思想の自由とジャイナ教』 春秋社, 1991.

服部弘瑞

- [2011] 『原始仏教に於ける涅槃の研究』 山喜房佛書林, 2011.

宮本正尊

- [1975] 「縁起説の一考察 —upadhi—をめぐって」『印度学仏教学研究』 23-2, 1975, pp. 723-727.

山崎守一

- [2001] 「初期ジャイナ教における頭陀」『仏教思想仏教史論集』 山喜房佛書林, 2001, pp. 77-97.

- [2018] 『古代インド沙門の研究』 大蔵出版, 2018.